

水彩 Technique。



メディウム！

新しいテクニックが新しい作風を生み出す、ということが水彩の世界でも始まっている。絵具自体を自作することで、水彩のタッチを変えたり、色合いに変化をつけたり、にじみを調節したり、マスキングをしたり、白抜きをする。メディウムを使うことで表現が変わっていきます。ホルベインから本格的な水彩用メディウムが出ました。専門店で。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ>オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

赤塚祐二

鷹見明彦 文
森田兼次 写真・印

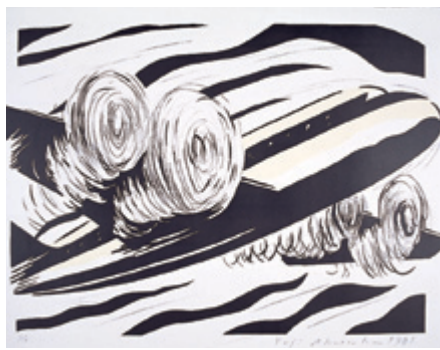
カナリアと風景の話



1983年、東京郊外、武蔵村山のアトリエにて。グラフィック・デザイナーをめざして広告会社で働きながら、リトグラフの作品を発表しはじめていた

1980

「版画のフレームを意識して、そこから飛び出すような図柄を描きたかった」

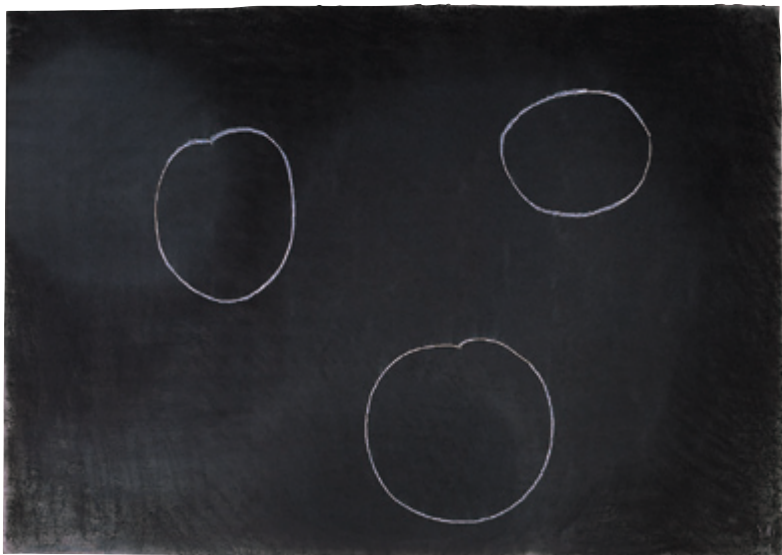


Airplane 1980 リトグラフ
65.5×84.5cm
撮影=末正真礼生

東京から特急に乗って房総半島の付け根を横断すると、九十九里浜の入り口の町に着く。そこで列車を降りて、画家の車で海へ向かう。アトリエの土地を探してここへ移り住んで、やがて10年が経つ。しばらく平坦な田圃の風景を走った先は、長い砂浜が延びている。休日になるとドライブ客やサーファーが集まる浜も、冬の午後には、季節はずれの潮騒が茫漠と響いている。

「画家は、鹿兒島湾の内奥の町、国分^{くわぶん}で育った。祖父の代から文具店だったので、子どものころから祖父に上質紙をもらって色鉛筆で描いたり、ダンボールで工作をして遊んでいました。印刷もやっていたので、材料には恵まれた環境でした。」

「父も、もともとは画家志望でした。戦争で絵の道には進めませんでした。家には若い時分に描いた油絵がありました。東京教育大現筑波大の美術科に行った3歳上の兄の影響も大きかったと思います。」
中学では陸上部で県大会にも出



Untitled 1990 紙にパステル
103×73cm 個人蔵 撮影=末正真礼生

1990 「その飽和状態のなかでなら、線が引けるような気がして、まるを描きました」

だが、兄と同じ甲南高校の美術部に入ってから、熱心な若い美術教師のもとで石膏デッサンに励んだ。

「美大受験で初めて上京しましたが、外国に留学する感じでしたね。すいどーばた美術学院では、芸大出身の小松（良和）先生に教わりました。あるとき、慎重な筆触で描いていた画面をぼろきれて拭き取られ、少し手を入れられたら、見違えるようによくまりました。絵に対する向かい方そのものが変わった体験でした」。

「たとえば古典的に見える口の作品などでも、筆だけでなく、じかに掌さえ使って描いているものがあります。そうしたざわり方やタッチのあり方に絵の生命が生まれることを知りました」。

1975年、東京芸大絵画科の油画専攻に入学。しばらくは、絵に向き合つ気になれずに過ごしたが、2年のときに受けた版画の集中講義がきっかけとなって、リトグラフを制作するようになった。



Canary 1996 1996 キャンバスに油彩
227×190cm 鎌倉画廊蔵 撮影=内田芳幸

「子どものころから馴染みがあった家の印刷と同じインクの匂いがしました。まわりでは、もの派とコンセプチュアルの揺りもどしがあつて、川俣（正）さんたちが、学内に自主制作室をつくって、盛んに話し合いをやっていました。僕は議論が苦手だったので、自閉的に版画制作に向かったという状況もありました」。

《Airplane》（1980）は、80年代に多く制作したリトグラフの初期作。疾走する自動車や、汗を流す顔のアップなど、ポップなイメージをグラフィカルに描いて刷った。オフレームの限定がはつきりとある版の画面を意識して、そこから飛び出す



Landscape 10411 2004 キャンバスに油彩
180×284cm 撮影=末正真礼生 写真提供=コバヤシ画廊

2004 「絵は、自分の心の状態が拮抗するものを探し求めて、彷徨う舞台装置のようです」

すような図柄を描きたかった」。

大学院を出るころには、グラフィックとデザインの仕事に就きたいと思うようになって、広告プロダクションで働きながら、銀座や青山のギャラリーで個展を開きた。バブルの時代で、ライトパブリシティ、サン・アドといった広告会社や、湯村輝彦、河村要助たちのイラストが輝いていた。

「メーカーの広告制作では、トレスコップという暗室装置の内で、版下に写真や写植の文字を貼り込む作業をつづけました。それは絵画に限らず、ひとつのフレームのなかで表現する訓練にならたと思います」。

そのころ、喘息に苦しみながら、東京郊外に最初のアトリエを半ば手づくりでこしらえた。4年間勤めた広告会社は、結局、工作上必要な人のコミュニケーションがうまくとれないことがわかって、退社した。その後に入った寝具メーカーの海外研修制度で、運よくヨーロッパを巡ることができた。旅行を契機に、再

び画家になりたいという気持ちが生きてきた。85年、30歳になっていた。「ボールペンで描きたのですが、紙に1センチ枠の大ききでは描けるのに、大きくしようとすると筆に集中力がのらなくて、キャンバスには描けませんでした」。

《United》(1990)は、B全紙にバスターを擦り込んで描いたシリーズの一作。あるとき、ロールで買った紙にひたすらコンテを擦り込んでいたら、紙の表面がペルソトのように毛羽立ちました。その飽和状態のなかでなら、線が引けるような気がして、まるを描きました」。

「仕上がりが想定できる版画に対して、画面にじかにさわって、徘徊するようにして描かれる絵があります。オーストラリアのアボリジニが大陸の上を彷徨いながら自分の聖地を探し訪ねていくという話には、共感を覚えます」。

《Canary 15603》(1999)は、紙の作品から間もなく、90年代とともに堰を切ったように描きたさ



房総・大網白里のアトリエにて。浜辺までは、1キロほど。空と海と田畑が広がるこの土地に来てから、風景が作品に反映するようになった。背景の作品は、『Gate』(2005)※

あかつか・ゆうじ 1955年鹿児島県生まれ。79年東京芸術大学美術学部油画専攻卒業。81年同大学院修士課程修了。現在、武蔵野美術大学油絵学科教授。

主な個展に84-88,90,92,93,95,96,2001,03-05年コバヤシ画廊(東京) 92,94,2002年ガレリア・フィナルテ(名古屋) 92,97,2002年ギャラリーエ・アンドウ(東京) 96,99,2002年鎌倉画廊(東京、神奈川) 98,2001,04年ギャラリー池田美術(東京) 99年駒ヶ根高原美術館(長野)など。主なグループ展は、92年「現代のドローイング展」(北九州市立美術館、福岡)「ART TODAY'92」(軽井沢高輪美術館、長野) 92-93年「形象のはざまに」(東京国立近代美術館 / 国立国際美術館、大阪) 94年「VOCA展'94」(上野の森美術館、東京)「光と影 うつろいの詩学」(広島市現代美術館) 95年「視ることのアレゴリー」(セゾン美術館、東京) 97年「ART TODAY 1997」(セゾン現代美術館、長野) 2001年「チバ・アート・ナウ'01 絵画の領域」(佐倉市立美術館、千葉)「かたちを求めて」11人の日本人作家(釜山市立美術館、韓国)など

れた油彩による大作の一点。このシリーズのタイトルは、鳥籠に出入りするカナリアのイメージから。

「このシリーズには、人間の設定した枠の内につかまえられる形象があるという意味がありますが、『カナリア』というのは、暗色のほかでは黄色が好きで、よく使うことからきています」。

《Landscape 10411》(2004)は、海辺の土地に住みはじめたから描くようになった水平の分割による最近作。画面にさわりだすと、やがてトーンが生まれます。そうするうちに線やかたちで捉えられるぎりぎりのところで、何がつかまえられるか……」。

「絵は、自分の心の状態が拮抗するものを探し求めて、彷徨う舞台装置のようです。この作品には、夏の田圃の緑の広がり、海から来る夕立ちの雲、それを見ていたときの気持が反映されています」。

「少し色彩が使えるようになってきた」という近作の画面には、灰色や暗褐色のフィールドになることが多い作例にくらべて、いつになく伸びやかに緑やブルーの筆触が広がっている。アトリエの上を大きな雲の影が、ゆっくり行き過ぎようとしていた。

2005年2月8日、千葉県山武郡大網白里町の作家アトリエにて取材

たかみ・あきひ『美術評論家』